

# シュレーバー『回想録』について

—世界大崩壊と「女への変身」—

金 関 猛

司 会：松本 直子

2015年度岡山大学文学部プロジェクト研究  
「ジェンダーの多層性に関する領域横断的研究」  
公開セミナー2

日 時： 2015年10月23日（金）17:00～  
18:30

場 所： 岡山大学文学部会議室

講演題目： シュレーバー『回想録』について—  
世界大崩壊と「女への変身」—

講 演 者： 金関 猛 岡山大学大学院社会文化  
科学研究科・文学部教授（ドイツ言  
語文化学）

司 会： 松本 直子 岡山大学大学院社会文  
化科学研究科・文学部教授（考古学）

主 催： 岡山大学文学部プロジェクト研究  
「ジェンダーの多層性に関する領域  
横断的研究」グループ

○司会（松本直子） 今日、今年度の岡山大学文学部プロジェクト研究の公開セミナーの2回目になります。このプロジェクト研究は、ジェンダーの多層性に関する領域横断的研究ということで、ジェンダーについていろいろな角度からアプローチしていこう、学際的に考えていこうという共同研究のプロジェクトです。

本日は、文学部の金関猛先生の方をお願いをしまして、「シュレーバー『回想録』について—世界大崩壊と『女への変身』—」という大変刺激的なタイトルでの発表をしていただきます。

○金関 猛 岡山大学の金関と申します。よろしくお願いたします。たくさんの方々に来ていただき、たいへんありがとうございます。

では、早速シュレーバーについて話を始めさせていただきます。シュレーバーという人は、1842年に生まれ、1911年に亡くなりました。法律家で、エリート裁判官でした。しかし、51歳で精神を病み、精神病院に入院します。その後、退院していた時期も

ありましたが、十数年間を病院で過ごしました。そして、一時退院していた1903年に『ある神経病者の回想録』を出版しました。

この『回想録』という書には、出版当初からかなり多くの精神医学者が注目していましたが、俄然大きな注目を集めるようになったのは、1911年にフロイトがこれについて論文を発表してからです。その後、この書は、ラカン、カネッティ、ドゥルーズとガタリ等々の分析の対象となります。シュレーバーという人物が分析対象となったのではなく、分析の対象となったのは、この『回想録』という書物でした。この本は、フロイト、ラカンという精神分析の領域のみならず、精神医学、あるいは文学研究、哲学研究等々の分野で、ひじょうに大きな注目を集めてきました。今では、シュレーバーの伝記的な研究も進み、シュレーバーその人についても多くの論文が書かれています。

シュレーバーが生まれたのは、ドイツ東部の大都市ライプツィヒです。そして、ライプツィヒの精神病院で亡くなっています。ライプツィヒで生まれ、その後、当時はザクセン王国の首都であったドレスデン—これは今のザクセン州の州都です—やケムニッツといったところで裁判官として活躍していました。さらに、『回想録』の中で何度も話題になるのが、ピルナという街です。これはドレスデン近郊の街で、ここにゾンネンシュタインという精神病院がありました。シュレーバーはこの病院に1894年から1902年の間、入院していました。地理的にはドイツの東部でいたい過ごしていたということになります。もちろんドイツ人です。

スライドで名前を挙げた人たちは、『回想録』で言及される人物です。シュレーバーは、ビスマルクの信奉者でした。政治的には保守派に属する人です。それから、ヴァーグナーというのは、音楽家のヴァーグナーで、シュレーバーはヴァーグナー・ファンでした。そのオペラの歌詞を『回想録』で幾度も引用しています。おそらくその歌詞を暗記していたのだと思います。ピアノ演奏が趣味で、ピアノ演奏についても『回想録』で幾度も物語っています。さら

に、ハルトマン、ヘッケルの名前を挙げていますが、この人たちは、当時の思想家、哲学者です。シュレーバーは『回想録』で、自分はハルトマンやヘッケルの本も読んできた、この人たちに影響を受けてきたということを語っています。それから、クレペリンは精神医学者ですが、今の精神医学の礎を築いた人とされています。シュレーバーは、入院中にこのクレペリンの精神医学の教科書を読み、そして、その一部を『回想録』で引用しています。精神病と診断された人が、精神医学者の本を読んでいるといった状況もあったわけです。

スライドでは、また、ニーチェ、フロイト、ヒトラーという名前を挙げましたが、この人たちは、シュレーバーと関わってよく言及される人たちです。フロイトは、先ほど申しましたとおり、シュレーバーの『回想録』について、論文を書きました。『自伝的に記述されたパラノイア（妄想性痴呆）の一症例に関する精神分析的考察』というタイトルで、1911年に発表されました。この論文によって、シュレーバーのことが世界的に知られるようになったわけです。

それから、ヒトラーですが、もちろんヒトラーとシュレーバーの二人に直接的な関わりがあったわけではありません。しかし、たとえば、エリアス・カネッティという人は—この人はノーベル文学賞を受賞したドイツ系の作家ですが—『群衆と権力』という本の中で、『回想録』がヒトラーの出現を予言するような書であるというふうに論じています。そして、パラノイアについて、「権力の病」という位置付けをしています。

ニーチェは1844年に生まれていますから、シュレーバーと同時代の人です。ニーチェもナウムブルク



図 1

というドイツ東部の街で生まれました。狂気と理性といった問題系で、シュレーバーを論じる際にニーチェがよく引き合いに出されますので、ここでその名を挙げておきました。

歴史的な背景について一言付言しておきますと、1870年から71年にかけて普仏戦争があり、71年にドイツ帝国が成立しました。ドイツ帝国が成立した後も、ザクセン王国は帝国内で存続していき、ザクセン王国のことが『回想録』の中でもよく言及されています。シュレーバーはドイツ帝国内のザクセン王国で生きていた人でした。

もう一人、シュレーバーを論じる際に、必ず引き合いに出される人物を紹介しておかねばなりません。それは、父、モーリツ・シュレーバーです。この人が、シュレーバーに大きな影響を与えているということがよく言われます。フロイトが論文を書いた段階ではモーリツについては詳細な情報が得られず、父親自身について論じてはいません。しかし、『回想録』から父親の影響を読み取り、父との関係を土台にしてシュレーバー症例論を展開しています。

モーリツ・シュレーバーは、もともと整形外科医でした。また、教育について多く論じており、今でいうと教育評論家と呼ばれるような人でもありました。とりわけ、体操を重視し、健康体操を創始しました。身体の鍛錬による心の教育を目指していたわけです。ライプツィヒ体操協会を設立し、健康体操をドイツに普及させた人として知られています。モーリツ・シュレーバーの著書『医学的室内体操』は当時、およそ30万部が出版されたベストセラーでした。この本は明治の早い時期にその一部が翻訳され、日本にも紹介されています。

このように心身の健康を重んじる人なのです。教育者モーリツ・シュレーバーの考えを、大ざっぱにフレーズにしてみますと、「健全な身体には健全な魂が宿る。まっすぐな身体にはまっすぐな魂が宿る。美しい身体は美しい魂を育む」ということになると思います。これはモーリツの言葉そのものではありません。しかし、ひじょうに単純化して総括すると、こういった考えを持った人であったと思います。実際、子どものまっすぐな姿勢、美しい身体ということを極端に重視しまして、『美しい子どもを育てるための教育』という本を出しています。

その著書に載せられたいくつかの道具を紹介します。これらは美しい子どもを育てるためのものです。Tの字方の鉄の器具は机に取り付けます(図1)。そうすると、椅子に座った子どもはまっすぐな姿勢を取らざるを得なくなります。決してかがんだりしてはいけないというモーリツの考えを子どもに強いる

道具です。

子どもは睡眠中も真っすぐに寝なければなりません。あおむけに寝るのが健康であるというので、この二つの輪を両腕に通し、ひもの先端をベッドに止めます。絶対うつぶせになったり、横を向いたりしてはいけませんという道具です(図2)。

次は、あごの整形器具。今でもこれに類したものは医療器具として使われているようです。頭部をベルトで締め付けて、あごを整形するための器具です(図3)。

こちらは、一本のベルトのように見えますが、上の方にクリップがついていて、下の方に穴が空いています(図4)。クリップで子どもの髪を挟み、下の方の穴に下着につけたボタンを入れます。すると、子どもがうつむいたり、横を向いたりすると髪が引っ張られ、痛い思いをします。これは頭部固定器(Kopfhalter)という名前がつけられています。この器具により、子どもは常に頭は真っすぐに保つことが強いられるわけです。

モーリツ・シュレーバーには、5人の子供がいました。今日お話しするパウル・シュレーバー、『回想録』を書いた人は3番目の子どもで次男です。長男のグスタフも裁判官でした。この人もエリートだったのですが、40歳になる前にピストル自殺をしています。動機はわかっていません。そして、次男のシュレーバーは、51歳で精神病を発病しました。

英語圏の精神科医でモートン・シャッツマンという人が、息子シュレーバーの精神病を父の教育から説明する本を書いています。『魂の殺害者』というタイトルです。この本は日本語にも翻訳されていて、かなり評判になりました。父親の教育と息子の病気を短絡させることについては、さまざまな批判もあります。つまり、当時の家庭で体罰は当たり前でしたし、父の権威が絶対的であったわけです。そういう社会ですから、父モーリツ・シュレーバーがとりわけ異常な教育をしていたとは言えないとも考えられます。当時の基準、当時のさまざまな常識から考えると、むしろ父、シュレーバーの教育方法はヒューマニスティックであったとさえ言う研究者さえいます。ですが、娘たちはともかく、息子が二人とも、あまりいい人生を送らなかったようですから、父の教育が成功したとは思えません。

推測の域を出ませんが、顎の整形器をつけた、このイラスト(図4)の少年はパウル・シュレーバーだという説もあります。つまり、父シュレーバーは、当然のことながら、自分の息子たち、娘たちにこういった教育を施したにちがひありません。そして、その結果が息子のピストル自殺と精神病といった悲

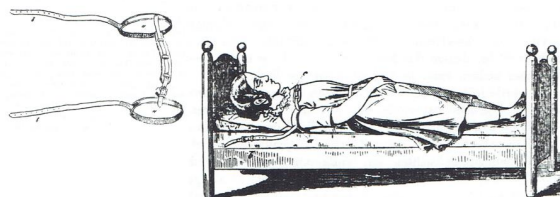


図2



図3



図4

劇であったわけです。

ちなみにということでお話ししますが、シュレーバーの名前自体は、ドイツ人にひじょうに広く、ごく一般的に知られています。というのは、シュレーバー・ガルテン(Schrebergarten)、つまり、シュレーバー菜園というものがドイツ中にあるからです。これは、モーリツ・シュレーバーの没後に、その信奉者が始めた施設です。都市生活者は、ドイツでも庭園を持つことが難しいので、都市で庭をもてない人のために協会があずまやのついた庭を貸し出すと

いう事業でした。借りた人は、土日にそこで畑仕事をして楽しみ、あずまやでリラックスします。もちろん、これ自体は、有害なものとは考えられません。今でもどういふわけか鉄道沿いにこの庭がたくさんつくられていまして、ドイツで列車で旅をされると、車窓からこのシュレーバー・ガルテンを目にされることがよくあるかと思えます。ついでに言いますと、岡山にもあります。岡山では小庭園という意味のクライン・ガルテンという片仮名の名前になっていますが、同じコンセプトの施設です。

さて、このパウル・シュレーバーの書いた『ある神経病者の回想録』は1903年に刊行されたのですが、原書で516ページにのぼる大部な書です。これは、シュレーバーが自らの妄想体験を克明に書きつづる書です。この本の日本語訳は、私と、今日来ておられますが、文学部教授であった尾川浩先生との共訳で1991年に平凡社から出版しました。そして、その本が2002年に文庫本で出版され、さらに2週間ほど前に中央公論新社からもう一度出し直しました。このときに二人で改訳をしたのですが、その間の1年ほどシュレーバーにまた関わってきました。そのことに基づいて、シュレーバーについて今日お話しすることになったという幸いです。

シュレーバーについて、大まかなこととお話ししておきますと、1842年生まれで、ライプツィヒ大学の法学部に入学し、そして、法曹界に入ります。1878年に結婚しますが、二人の間に子どもは生まれませんでした。1884年、すでに裁判官であったときに、帝国議会選挙に立候補し、落選します。このことがきっかけになって、精神に変調を来して、ライプツィヒ大学附属病院の精神科に入院します。このときの主治医が、フレックシヒ教授という有名な精神科医で、脳科学者でした。

このときは半年間の入院で全快して退院します。その後、ライプツィヒ地方裁判所民事部部長に就任します。これは栄転です。このときの病気のことを『回想録』では、「最初の病気」と呼んでいます。そして「最初の病気るときには、超感覚的なものの領域にわずかでもかかわるような出来事はまったく起こらなかった」と自ら述べています。つまり、これが意味しているのは、神の声とか、魂の声とか、そういうものが聞こえてくることはなかった、つまり幻覚とか、幻聴はなかったということです。

そのときは、無事に退院して栄転するわけです。さらにその数年後、ドレースデンの控訴院の民事部部長という、きわめて高い地位の裁判官に就任します。控訴院というのは今の日本でいうと高等裁判所にあたります。このときの職場でのストレスが原因

になって、また精神のバランスを崩したのだと当人は書いています。そして、ふたたびライプツィヒ大学附属病院でフレックシヒの診察を受け、その病院に入院します。それは幻覚と妄想をとまなう精神病でした。当時の診断ではパラノイアとされています。今だとたぶん統合失調症と診断されると思います。

このフレックシヒという名前が、『回想録』の中でも幾度も繰り返して出てきます。そして、このフレックシヒ教授が、後で紹介しますがけれども、シュレーバーにとっては、いわば運命の人、宿命の人となりました。

その後、理由は『回想録』にも書かれていませんが、ライプツィヒ大学医学部附属病院から、短期間、別の私立病院に移り、さらにゾンネンシュタインという病院に転院します。そして、ここに1894年から1902年まで7年半にわたって入院します。1902年に一応回復したということになって、退院するのですが、回復したと言い切れるのかどうかは微妙なところですが、とにかく退院して、その後、5年ほど平和な穏やかな生活を送ります。『ある神経病者の回想録』を出版したのも、その間のことです。

時間的に少し後戻りしますが、ゾンネンシュタイン入院中の1900年にドレースデンの裁判所で、シュレーバーの禁治産が決定されます。つまり、シュレーバーには財産の管理能力がないと判断されたわけです。それに対して、シュレーバーは禁治産取消しの訴えを起こします。地方裁判所でその訴えは棄却されますが、シュレーバーはさらに控訴します。そのため、これについては控訴院、つまり自分が勤めていた裁判所で争われることとなります。その際に、シュレーバーは自ら控訴理由書をはじめ、さまざまな書類を裁判所に提出をし、自ら裁判手続きをし、そして、勝訴を勝ち取ります。そのときの控訴院の記録も、『回想録』の中に資料として収められています。

ゾンネンシュタイン退院後、1907年にふたたび精神のバランスを崩して、デーゼンという病院に入院しますが、もうこのときは読み書きも、対話もできない状態になっていました。そして、そういった状態のまま病院で68歳で亡くなります。

1902年に禁治産が取消しになり、退院してよろしいということになって退院したので、その時点でシュレーバーは回復していたということになります。ところが、シュレーバー自身、退院後に出版した書に、『ある神経病者の回想録』というタイトルをつけています。「ある神経病者」というのは、もちろん自分自身のことを指しています。ただし、この本では、自分は確かに神経病だ、しかし、断じ

て精神病、パラノイアではないという立場が貫かれています。

この神経病ですが、これは「聖なる病気」なのだ、というのがシュレーバーの主張です。一般に言われる神経病とはまったく意味合いが異なります。シュレーバーの主張として、神経病は「聖なる病気」であり、そのせいで自分の神経が病的に興奮してしまうのだというのです。そして、その興奮ゆえに、神とか、あるいは無数の魂が自分の神経に引き寄せられてしまうという事態が起きているといえます。さらに、自分の神経と神や魂の神経が「神経接続」によってつながってしまったために—いわばケーブルかWi-Fiでつながっているようなものです—神とか魂の声を聞くようになり、様々なビジョンを見るようになったのです。さらにまた他方、神が不正常なかたちで自分と結び付いてしまい、神が自分にしか興味を向けなくなったために、世界は破滅的な危機に陥っている、あるいはすでに崩壊してしまったとシュレーバーは考えています。私たちから見れば、それは妄想というほかありません。しかし、彼にとってはそれが現実となります。

『回想録』の中で一番最後に書かれた文章では、確かに自分がそれを書いている時点で世界が破滅してはいないと言っています。しかし、その時点でも、過去にはいったんは世界は崩壊していた、自分は神の声を聞いていたし、神の声を通じて自分は真理を洞察したのだと強く主張しています。

禁治産を取消した裁判所の判断について述べますと、判決では、原告が精神病であることは、控訴裁判所にも疑いの余地はないと書かれています。しかし、他方、自分で裁判手続きをするほどの事務能力を備えているのだから、日常の用務は果たせるのは明らかだ、だから、禁治産は取り消すという論理で、禁治産を取消す決定を下します。こうした裁判所の論理と、神経病者であるシュレーバー自身の論理は、見事に一致しています。「控訴理由書」ではまさにそうした論理で、禁治産取消しを求めているのです。唯一の違いは、裁判所がシュレーバーが精神病であると決めつけているのに対し、シュレーバーが精神病であるかどうかについて議論するつもりはないとしているところです。百歩譲って精神病であるとしても自分が日常の事務を果たせるのは明らかではないか、だから、禁治産を取消すべきだというのがシュレーバーの論理でした。

『回想録』は、たいへん複雑な構成を持っています。本文22章がもちろん主要な部分です。この本文と補遺で神と世界に関する考察が述べられ、様々な個人的な体験が報告されています。補遺の次に付録

論文が収められています。これは法学論文で、「精神病とみなされる人物の医療施設での拘禁は、本人がそれを拒否するはっきりとした意志を表明している場合、どういった前提条件があれば許されるか」というタイトルです。これは、まったく現代の問題でもありえます。それを入院している患者自身が、きちんとした論文として書き表しているのです。ここには、妄想的なことはいっさい書かれていないので、法学雑誌に載せてもよいのではないかと思います。しかし、著者が交渉した雑誌の編集部は、紙面の余地がない等々の理由で掲載を拒否したということが『回想録』に書かれています。

先ほど述べましたように禁治産取消しの裁判記録もここに「資料」として載っています。ここには自分の主治医の鑑定書なども収められています。鑑定書にはシュレーバーにとって、部分的にはひじょうに不利なことも書かれています。しかし、そうしたことには構わず、とにかく客観資料としてきちんとここに載せているわけです。そして、この裁判は、今述べましたように、シュレーバーの勝訴で終わりました。

冒頭には、1903年3月、『回想録』の出版直前に書かれたフレックシヒ教授宛での公開状が掲載されています。これが最後に執筆された部分です。つまり、最後までフレックシヒ教授にこだわり続けているわけです。

フレックシヒ教授がシュレーバーの主治医を務めたのはライプツィヒ大学の附属病院です。そこから、ゾンネンシュタインに転院したわけですし、また、シュレーバーが最後にフレックシヒに会ってからすでに8年ほどが経っています。シュレーバーはフレックシヒから遙かに離れたところにいるのですが、ずっとフレックシヒに迫害されているという妄想を抱き続けています。ちなみに、フレックシヒは、医学史に残る業績を上げた人で、脳科学の父の一人に数えられています。

『回想録』の第4章から一部を紹介します。シュレーバーはフレックシヒのおかげで「ついに健康を取り戻した」と書いています。これは、「最初の病気」のときのことを言っています。つまり、1884年の帝国議会の選挙で落選した後の病気のことです。さらに続けてこう述べます。

それゆえ、その頃の私はフレックシヒ教授に対してはただもう心からの感謝の気持ちだけを抱いていた。私は後に実際教授を訪問し、適当と思われる額の謝礼を差し上げて、とくに謝意を表したのだ。ほとんど私以上に感謝の念を抱いていたのは妻であった。

あるときまでシュレーバーはフレックシヒに対して、最初の病気を治してくれた恩人であると認識していたのです。

ところが、今、申しました、フレックシヒへの公開状、一番最後に書かれた書状では、「[フレックシヒの魂が] 超感覚的な力を獲得し、その結果、何年にもわたって私に害悪を及ぼし、今日に至るまで及ぼし続けている」とされ、「この点についても私にはまったく疑いはありません」と断言されています。日本風に言えば、フレックシヒの魂が生き霊としてフレックシヒの体を離れ、シュレーバーを迫害し続けたと言っているのです。

『回想録』をもう少し紹介していきます。「はじめに」でシュレーバーは、何のためにこれを書いたのか、その理由を次のように述べています。

この記録において私は、おおよそこの6年のあいだに私にとって明らかとなってきた超感覚的な事柄について、他の人々にも少なくともある程度は理解できるような説明を試みるつもりである。

それから、18章でもこう述べています。

ここに書かれているのは、他の人々にはその本性からして近づきえない経験に基いて、何年にもわたって熟慮を重ねることで得られた成果なのである。

このようにシュレーバーは明晰かつ緻密な文体で文章を書き綴ります。そして、自分こそが「神の啓示に与らなかった他のすべての人々より、真理に限りなく近づいたことだけは疑いの余地はない」と言っています。あるいは、18章でも「私の成果はともかくここ数千年のあいだに他の人々がこうした問題について思考し—「こうした問題」とは神とか、世界の始まりの問題とかいったこと—「書きつけてきたこととは比較にならぬほどに真理に近づいているのである」と主張しています。シュレーバーは、自分は真理探究の人間であり、そして、自分こそが真理を洞察したのだという揺るぎない確信を抱いているのです。

自分が真理を洞察したのは、自分の神経が神の神経と結合し、それを通じて神の啓示に与ったからだというのがシュレーバーの主張です。そしてまた他方、神はそのせいで世界維持をなおざりにしてしまったのだと言います。つまり、神は、シュレーバー一人のみに興味、関心を向けてしまうので、そのせいで世界は崩壊の危機に瀕しているというのです。そして、シュレーバーは宇宙滅亡の危機を示すヴィジョンを目の当たりにします。たとえば、次のように記されています。

私が毎夜見たヴィジョンのなかでは、すでにひじょうに早くから、神と私とのものはや解き難い結合によって招来される世界の滅亡というイメージが前面に現れ出していた。どこそこの星もどこそこの星座も今や「放棄」されねばならなくなったという凶報が四方八方から届いた。あるときには、今や金星も『洪水に覆われている』とか、またあるときには、今や太陽系全体が『取り除かれねば』ならなくなったとか、さらにはカシオペア座が（この星座全体が）収縮してただ一つの太陽にならざるをえなくなったとか、ひょっとするとまだ救うるのはプレアデス星団ぐらいのものかもしれない等々ということが伝えられた。

また別の箇所ではこう書かれています。

そしてまたこのフレックシヒの施設全体 [ライプツィヒ大学附属病院のこと。その病院に入院していたときのことを回想しています] あるいはひょっとすると施設と一緒にライプツィヒの街までが地球から『抉り出』され、どこか別の天体に移されてしまったというような可能性についても私は思いをめぐらした。私と語る声のときおり発する、いったいライプツィヒはまだ存在しているのかなどという問いがこうした可能性を示唆しているように思われた。

地球にとどまらず、宇宙大崩壊が、今、現実に取りつつあるというのです。その際、注目すべきこととして、その大崩壊は、自分の身には及ばないということがあります。つまり、ライプツィヒの街だけが地球からえぐり出されて、自分はそれとともに安全地帯にいるというのです。一方に宇宙大崩壊の妄想があり、他方、自分は特別な存在で、自分には危害は及ばないという妄想があります。

さらに第6章から引用します。

ヴィジョンの中で繰り返し話題となっていたのは、一万四千年に及ぶ過去の成果が失われた—この一万四千という数字はたぶん地球上に人間が定住していた期間を示すものである—ということ、そして地球に残された存続期間は後わずか二百年ほどにすぎない—私の思い違いでなければ二一二という数字が挙げられていた—ということであった。フレックシヒの施設での入院生活の最後の時期には、私はこの存続期限がすでに切れてしまったものと考えていた。したがって生き残ったほんとうの人間はこの私一人きりで、その他私が目にする人間の姿—フレックシヒ教授その人、数人の看護

士、多かれ少なかれ奇怪な様子をしたほんの幾人かの患者—は、単に奇蹟によって捏造された「かりそめに急ごしらえされた男たち」であると思っていたのである。

確かに他人の姿は見えるのですが、シュレーパーにはそれが生身の人間ではなく、「かりそめに急ごしらえされた」者たちにしか思えないのです。もう1箇所、第4章から引用します。

ずいぶん時が経ってから、たまに向いの部屋の窓辺に妻を見かけることがあった。しかし、その間に私を取り巻く環境や私自身の内にきわめて重大な変化が生じていたため、私は自分の見た妻がもはや生きた人ではなく、「かりそめに急ごしらえされた男たち」と同じように奇蹟によって捏造された人間の姿にすぎぬと思ったのである。

つまり、自分の妻でさえ、生身の人間とは思えないのです。ほんとうの人間は、自分一人きりで、その他の人たちは、すべて「かりそめに急ごしらえされた男たち」か、それにたぐいする者なのです。この言葉に括弧がしてあるのは、シュレーパーによると、それが彼の造語ではなく、外部から、すなわち「声」から聞いた言い回しだからです。彼が聞く「声」は「かりそめに急ごしらえされた男 [たち] 」という言い回ししか使わないので、妻についてもこの言い回しを用いるほかないのです。

ここには、ほんとうの人間は自分一人きりであり、他の者は、生き血の通わぬはりぼて人形のような者だという対照関係があります。他の者は、死に絶えてしまったか、死に絶えてはいないまでも、「かりそめに急ごしらえされた」者でしかないのです。現実界は崩壊してしまったか、そのさなかにあります。つまり、シュレーパーは存在しているのは自分だけ、外界は存在しないと感じているのです。

この引用では、ライプツィヒ大学附属病院に入院中のことを語っています。その後、シュレーパーはライプツィヒから、ゾンネンシュタインという病院に移ります。その病院に移っても当初シュレーパーの病状に変わりはありませんでした。

このゾンネンシュタインという病院について、少しお話ししておきます。病院はドレーズデン近郊のピルナの街を見下ろす丘の上にあります。これは2005年に撮った写真です。この建物はもともとは城だったのですが、1811年に精神病院が開設されます。この病院は、それまでは犯罪者と同列に扱われることもあった精神病患者を患者として治療することを目指した、ドイツでは初めての病院でした。当時としては画期的な施設であったわけです。ここには悲劇



### ゾンネンシュタイン

的な過去があるので、実際に行ってみると、とても不気味な感じに襲われます。

その過去についてお話しします。きわめてヒューマニスティックな理想の下に開かれた病院なのですが、開設後まもなくいったん閉鎖されてしまいます。1813年にロシアから敗走するナポレオンが、ピルナの街に逗留します。街には逗留したことを記念する碑銘もあります。ナポレオンは、精神病患者に対する理解はまったくありませんので、ゾンネンシュタインを視察すると、直ちに閉鎖を命じます。つまり、どうしてこんな病院などというものを精神病患者のために、狂人のために開設するのか、ナポレオンには理解ができないわけです。患者たちは病院から追放されてしまいました。しかし、その翌年1814年に病院は再開されました。

ところが、それから百年以上経って、これはシュレーパーの没後ですが、悲劇が繰り返されます。1940年から翌年にかけてヒトラー政権下で、いわゆるT4作戦により、ゾンネンシュタインで1万3720人の精神障害者が虐殺されます。スライドにあるのは1936年のプロパガンダ・ポスターです。ドイツ人が二人の人間を背負っています。そして、ここにはein Erbkranker、つまり、遺伝病者と書かれています。遺伝病者という言い回しが指し示すのは精神病患者です。つまり、精神病患者を支えていくことは、ドイツ人の重荷になっている、経済的にも大きな負担だというプロパガンダです。負担になっているんだから、その負担を取り除けばよいという極端に短絡的な政策がとられ、虐殺行為にまで至りました。もちろん虐殺は秘密裏に行われ、一般のドイツ人は知らなかった、少なくとも表向きには知らないということになっていました。

ゾンネンシュタインには「ファシストの犯罪の犠牲者を悼んで」という石碑が設けられています。フ

ファシズムという用語を用いたのは旧東ドイツ、ドイツ民主共和国ですので、これは明らかに社会主義ドイツがつくった石碑です。

先ほどの「ほんとうの人間はこの私一人きり」、他の人たちは「かりそめに急ごしらえされた」者たちで、現実界はすでに崩壊しているんだという図式に戻りますと、これはそのままヒトラーとその一党のイデオロギーに当てはまるのではないかと考えられます。

Nationalsozialismus (国民社会主義) の教義では「ほんとうの人間は、私たちドイツ人だけである」ということになります。その教義に従えば、ユダヤ人やその他の劣等民族、あるいは精神障害者は「かりそめに急ごしらえされた」いかげんな連中ではかりません。だからこそ、虐殺したってかまわないということになります。そもそも現実界というのはかりそめのものでしかないのだから、いくら破壊したってそれは大した問題ではないのです。

生身の人間のようにでも、それは「かりそめ」の者でしかなく、また現実が現実でないからこそ、虐殺し、破壊できたのではないかとこの図式で考えますと、パラノイアとファシズムが結びつきます。このことは、エリアス・カネッティがパラノイアを「権力の病」と位置付けたことと関わってくると考えられます。

ファシズムを狭い意味で歴史上のファシズムととらえるべきではありません。現在でも文明の遺産を「かりそめ」のものでしかないと思なすからこそ破壊する暴力集団が存在し、今でもなお蛮行が繰り返されています。そこにはやはりパラノイアというメカニズムが関わっていると考えられます。ゾンネンシュタインに戻ると、皮肉なことにシュレーバー自身は、虐殺される側の人であったという、さらに込み入った関係を見ることができます。

さて、生き残った、ただ一人の人間である私としてのシュレーバーが、何を体験するのか『回想録』にはそのことが詳述されています。まず、シュレーバーは身体への「奇蹟」による攻撃を体験し、それについて延々と報告しています。

私の身体には、奇蹟によってつかの間であれ傷つけられなかった部分や器官は一つとしてなく、奇蹟のせいで引き攣らなかつた筋肉は一筋もなかつたと断言できる。そのつど追求される目的の相違に応じて、筋肉に運動が強いられ、あるいは麻痺が起こされたのである。幾度も幾度も繰り返し、いわゆる「肺蛆」が奇蹟によって私の肺の中に送り込まれた。

シュレーバーは、「肺蛆」がどのようなものであ

るか説明しがたいが、これが送り込まれると、肺の中で「刺すような痛みが走る」と述べています。また、幾度も肺が収縮してしまうことや、さらには胃のない状態で暮らしたことがあったと書いています。

こうした身体への「奇蹟」による攻撃に、先ほど紹介しましたシャッツマンは、父モーリツ・シュレーバーの教育、つまり、締め上げ、縛り上げ、締め付ける教育の反映を見いだしているのです。他方、シュレーバーは、いくらこういった攻撃を受けても、「どんな身体的障害も光線によってふたたび癒やされる」、だから自分は、おそらく死ぬということも無いのではないかとこのことも言っています。

自らの身体で、「奇蹟」を体験するのですから、それはひじょうに強烈な現実なのです。自分の胃がなくなってしまうというのは、シュレーバーにとってまったく現実であり、また、肺の中に蛆虫が送り込まれるということを強烈な現実として感じるのです。だから、私たちの判断では幻覚と言わざるを得ないものが現実となり、私たちにとっての現実、彼にとっては「かりそめ」のものになってしまうわけです。

そのなかで彼が「もっとも恐るべき奇蹟」と呼んでいるのが、脱男性化の奇蹟、「女への変身」の奇蹟です。それについて次に考えたいと思います。シュレーバーによれば、自分を女に変身させるという陰謀が神の国でたくらまれています。その部分を引用します。

この陰謀はさらに私の神経病がいったん不治の病であると認識されるか、あるいはそのように推測されれば、私をある人物にあてがおうということを目論むものであった。その際私の魂はそのままその人物に引き渡されるのであるが、身体の方はまず女体への変容を蒙った後、女体としてその人物に引き渡されて性的虐待を受け [中略] そして、さらにそののちにはただ『放りっぱなしにされる』、すなわち腐敗するがままに放って置かれることになっていたのである。

「女体」となったシュレーバーが誰にあてがわれるのかという点について、フロイトは、これは主治医フレックシヒのことが念頭にあるのだろうと書いています。つまり、シュレーバーは自分は女に変身させられ、女としてフレックシヒから性的虐待を受けると思っていた、あるいはそんな妄想におびえ、おののいていたと、フロイトは考えます。

『シュレーバー症例論』でフロイトは、この「女への変身こそが妄想形成の核心であり、その発端であった」と書いています。フロイトはとりわけ『回想録』第4章の次の部分に注目しています。これは、



「神経病」の症状が現れる前、まだドレーズデンの控訴院民事部部長に就任する前の思い出です。病気になる前、その症状が現れる前にこんな空想が頭にふと浮かんだということが報告されています。

朝方まだベッドで横になっていたときに、私はあることを感じた。後で完全な覚醒状態で思い返してみたとき、私はきわめて奇妙な具合に動揺してしまっただけで、性交を受け入れる側である女になってみることもやはり元来なかなかかけっこうなことにはちがいないという考えであった。このような考えは私の気質にはまったく無縁のものであった。言うまでもなからうが、意識が完全に目覚めていたなら、私はこんな考えを憤然と退けたであろう。

ここでは、女になってみるのもいいかもしれないという考えが「私の気質にはまったく無縁のものであった」と強調されています。当時の父権制社会の父権そのものを体現する裁判官、裁く者、掟を執行する者、いわば男のなかの男としてのシュレーバーにとって、女への変身というのはまさにあり得ないことであったわけです。

当時のヨーロッパは、日本以上にきびしい男権制、父権制が確立した社会ですから、成人した男子こそが真の人間であるという共通理解がありました。男性性を強調する社会において、裁判官が女になってみることもなかなかかけっこうなことだなどは、絶対に言うてはならなかったのです。ところがシュレーバーの脳裏にある朝そんな空想がふと浮かびました。これについて、シュレーバーは「その考えを私に吹き込んだ何かしら外部からの影響がそこに一枚噛んでいたのではないかと推測します。つまり、こうした空想と「神経病」を結びつけるのです。そして、またフロイトも、女として性的体験をするというこのシュレーバーの空想に注目して、彼の精神病を解明しようとしています。

フロイトは、このふと浮かんだ空想を同性愛リビドーの突発なのだと理解します。「娼婦として遺棄され、フレックシヒに性的に虐待される」という妄想は、フロイトによれば、同性愛リビドーとの葛藤、同性愛の欲望とそれに対する防衛を表現する妄想なのです。つまり、一方でフレックシヒという男に抱かれたいという欲望があるのですが、他方、男に抱かれるなんてことは絶対拒否せねばならない—その葛藤の表現として、「娼婦として遺棄され、性的虐待を受ける」という被害妄想が形成されると考えるわけです。

ところが、この妄想は『回想録』において時の経過とともに変化していきます。シュレーバーにとっ

て、それは「妄想」ではなく、「考え」ということになりませんが、とにかく「女への変身」の受け止め方が変わっていくのです。その変化の経緯を記すのが『回想録』の主な内容でもあります。その変化の経緯というのは、娼婦として遺棄されるのではなく、自分は神の女となり、やがては神の子を宿すんだという考えに移っていくところにあります。娼婦になるわけにはいかないが、「神の女」になることなら、まだ受け入れ可能です。こういったかたちで同性愛リビドーとの妥協が図られ、同性愛が受け入れられる—フロイトはそのように考えています。

そのことが書かれているのが、『回想録』本文のほしい真ん中辺りの第13章です。そこにはこう書かれています。

私の人生の歴史に、またとくに今後ことがどう進んでいくのかを予測するときの私自身の考え方に重大な節目が刻まれたのは、1895年11月のことだった。

このとき「私の身体に女性化の徴候が歴然と現われたのである」といいます。自分の体に女としての印象を感受したということです。脱男性化の結果、そこから生じることとして考え得るのは、もちろん「新しい人間の創造を目的とする、神の光線による受胎のみであった」とされ、またそれゆえに「それ以来、私は女性性を育むということをはっきりと自覚をもって標榜してきた」と書いています。

第13章では「1895年の11月」と時が明記されています。この人はもともと裁判官ですから、場所と時間をはっきり特定するという習性がある、事細かに時と場所を記しています。ところで、この1895年11月は、シュレーバーが53歳になった月です。彼の父は、53歳の11月に急死しています。現代人でも、もう自分の父が死んだ年になったとか、それに類したことを口にすることがよくあります。そうした意味で、この1895年11月はシュレーバーの内でも父が死んだときだと解釈できるでしょう。そして、もう自分の内に父はおらず、もはやきびしい禁止もないのだから、神の女となり、神の子を宿すことを受け入れられるようになった、そのことを自分に許せるようになったと考えられます。ただし、フロイトはシュレーバー父子の生年、没年は知りませんでしたし、こうしたことは書いていません。シュレーバーの伝記の詳細が明らかになったのは1980年代以降です。

1895年11月以降、第13章で語られるように、自分の女性化を認めると、シュレーバーはある程度の精神の安定を得ます。そののち「『かりそめに急ごしらえされた男たち』、『人間弄弄』など、これまで

私の抱いてきた観念を批判的に検討してみようと思  
い立った」（「人間玩弄」とは「神の奇蹟が人間を  
弄ぶ」という観念です）とか、「ほんとうの人間た  
ちが、以前と同じ人数で、以前と同じ場所に居住し  
ていることにはや疑いの余地はなくなった」と書  
かれています。1895年11月に「女性性を育む」と決  
意したのち、それから2、3ヶ月すると、現実界で現  
実の人間が生きているという認識を持たざるを得な  
くなったと書かれています。

フロイトは、同性愛リビドーと妥協し、同性愛を  
受け入れることによって、すなわち、「神の女」に  
なるという新たな妄想によって、内的な葛藤に折り  
合いをつけたのだと述べています。シュレーバーは、  
いわば新たな妄想によってある程度まで現実を回復  
するわけです。

ところが、シュレーバーにとっては現実を回復す  
ることで難題が持ち上がりました。以前の体験と今  
の認識にどう折り合いをつけていいのかわからない  
という難題が生じたのです。ほんとうの人間が生き  
ていることは認識するのですけれども、しかし世界  
大崩壊が妄想であったとは絶対に認めません。自分  
の体験は強烈なものであったわけですから、それを  
否定するわけにはいかないのです。シュレーバーは、  
この問題は自分にも解決できないと認めています。

客観的に考えると、同性愛リビドーとの妥協によ  
って現実の一定の回復がなされるのですから、逆に  
同性愛リビドーとの闘争、そして、その闘争におけ  
る度重なる敗北が外界の破滅、世界大崩壊という妄  
想を生んだのだ、ということが出来ます。つまり、  
内的な闘争と敗北の投影、投射として、外界の破滅、  
崩壊という妄想、あるいは幻覚が生じたと考えられ  
ます。

『回想録』の後半では「やがては神の子を受胎す  
るであろうが、そこにはまだ至っておらず、それま  
では神（の光線）に性的快感（「官能的愉悅」）を  
提供することが自分の義務となる」といったことを  
述べています。こうしたことがシュレーバーにとつ  
ての『回想録』における着地点となります。第21章  
で—全22章ですので、第21章は本文の終わり近くで  
す—シュレーバーはこう述べています。

むしろ私は、自分が、男であると同時に女であ  
るという人間として、自分自身と性交する様を  
思い浮かべ、さらに、性的に興奮することを目  
指して、もちろん決して自慰に類するようなこと  
ではないが—普通ならばおそらく卑猥とされる  
ような—ある種の行為をせねばならないので  
ある。

このような状態で、同性愛リビドーと折り合いを

つけ、ある程度まで現実を回復し、そして退院が認  
められたのです。その状態は、愛の対象となるよう  
な現実の男性を見いだす同性愛ではありませんで  
した。あくまで妄想的で、自分自身を性的対象とする  
ナルシシズム的な同性愛でした。そこで、一応の区  
切りをつけて、『回想録』という書は終わっていま  
す。

以上、『回想録』についてかいつまんで述べてき  
ました。この書については、さらに多様な見方がで  
きると思います。今まで述べてきたことについて、  
あり得る疑問を先取りして、さらに話を続けること  
にします。まずあり得る疑問としてシュレーバー  
は同性愛というより、むしろ性同一性障害ではない  
のかというお考えもあると思います。しかし、性同  
一性障害者は自分の身体が女（男）の身体でないこ  
とははっきり知っています。そして、心と体の不一  
致に違和感を覚え、苦しんでおられるわけです。そ  
れに対して、シュレーバーは自分の身体がすでに女  
性に変容していると信じています。つまり、性同一  
性障害の方は、現実を正しく認識し、だからこそ苦  
しんでいるのに対して、シュレーバーは、現実認識  
が欠如しているのです。ですので、性同一障害者は、  
目下のところ障害者と呼ばれているのですから、障  
害があると考えねばなりません。しかし、シュレ  
ーバーのような精神病ではないということは、はっ  
きり言えます。シュレーバーは『回想録』の「はじ  
めに」でこう述べています。

私は（それは私がまだフレックシヒの施設  
[ライプツィヒ大学医学部附属病院精神科]  
にいた頃のことであった）すでに  
二度にわたって、幾分か発達不全であ  
ったとはいえ、女性器をもったことがあり、  
また人間の胎児の最初の胎動に相当す  
る、跳びはねるような動きを体内に感じ  
たのであった。

「はじめに」は最後に書かれた部分ですが、こ  
こでもまだ自分は妊娠したことがあると主張してい  
ます。男が妊娠することはありませんから、こうした  
主張は現実と合致してはおらず、それは狂気の発言  
だと言わざるを得ません。つまり、狂気か正常か、  
その判断の基準は、現実認識を他者と共有できるか  
どうかというところにあると考えられます。ある考  
えの現実性を大多数の他者と共有できるかどうかと  
いう辺りが、狂気と正常の危うい境となってくるよ  
うです。

さらに別の疑問として、女として男を愛するとい  
うのであれば、それは同性愛ではなくて、異性愛で  
はないのかという疑問があり得ます。これについて

考えてみます。シュレーバーの同性愛は一この人は結婚までしているのですから一異性愛を経た後の同性愛です。あえて言えば、正常な同性愛ではありません。シュレーバーには、男を愛するということが、異性愛のかたちでしか表象できない、思い浮かべることができないのです。そういった点が、一般の同性愛とは違うところです。

スライドの図はフロイトのリビドーの発達段階、あるいは性の発達段階に関する学説をものすごく単純化して書いたものです。まず、自体性愛の段階があります。これは身体の個々の部分で快感を感じている、口唇とか肛門などの部分で快感を感じている段階です。ですから、統一的な対象を知らない段階とされています。ナルシズム期。この時期には、自分が一つの統一体であるということ認識し、統一体としての自分にリビドーを向けます。これは自分自身を愛するという段階です。そして、オイディプス期を経て、少年期に同性愛の段階に入ります。だいたい小学生の頃です。その頃には皆、少年同士で、あるいは女の子同士で遊んでいるわけです。それで、思春期になって異性愛の段階となります。異性愛の段階に入っても、それで同性愛がその人の中で消えてしまうわけではありません。おそらく友情というかたちで、同性愛は一生残ります。あるいは、自分を大事にするという気持ちは、幼児的なナルシズムに由来します。性愛のさまざまな様態は重層的にその人の中で生き残っていきます。

フロイトは、リビドーがこのような段階を経て発達すると考えます。そして、同性しか愛せないという意味合いでの同性愛については、同性愛の段階でリビドーの発達が止まってしまい、それ以上先に進まなかった現象であるとフロイトは考えるわけです。そして、また何かの障害によってリビドーの退行が生じることもあるとフロイトは考えます。シュレーバーにおける退行は、おそらく同性愛段階へ、さらにはナルシズム段階への退行であったと考えられます。

さらに、ではなぜ突然 51 歳の裁判官に同性愛リビドーが突発するのかという問題があります。これについてフロイトは明確に答えてはいません。それはわからない、不明であるとも書いてはいませんが、それに関する回答はありません。つまりシュレーバー症例を分析していくとここまでは言えるが、しかし、なぜそうなるのかはわからないというのがフロイトのスタンスです。しかし、むしろこの「わからない」ということによって、フロイトの考察は現代の精神医学と結び付けることができるのではないかと考えられます。現代の精神医学では、パラ

ノイアという語は、ほとんど用いられていません。これに当たるのは、統合失調症です。統合失調症の原因は、まだ解明されていません。しかし、神経伝達物質が関わっているという説が有力です。

もともとフロイトは、脳科学者でした。脳を研究対象とし、実際に脳の解剖もしていました。脳科学者であった時代に失語症について書いた著書があります。これが、フロイトの最初の著作です。この本で、フロイトは脳に障害が生じたとき「多言語を運用する人の場合、最後に学んだ言語から失われていく。得意／不得意、学んだ期間の長短に関わりなく」最後に学んだ言語から失われていくと述べています。つまり、例えば私の場合ですと最初に日本語を学び、それから、中学校で英語を学び始め、大学でドイツ語を始めました。一番得意な外国語はドイツ語です。学んだ期間も一番長いのはドイツ語です。ところが、何か脳に障害が起きた場合は、得意、不得意にかかわらず、私の場合、ドイツ語がまず駄目になり、それから、その次に中学校から勉強した英語が駄目になって、ついに日本語も運用できなくなるということになります。私の場合、子どものころは関西弁をしゃべっていたので、たぶん最後は関西弁になっていくと思われます。つまり、フロイトは、脳において言語運用に影響を及ぼす障害が生じた場合、言語面で退行が生じると考えるわけです。

障害と退行の関係をさらに精神病に拡大して考えてみます。すると、何か脳に異常が生じた場合、たとえば、ドーパミンの過剰分泌を惹き起こす障害が起きた場合、性愛の面で退行が生じるのではないかと、同性愛リビドーの突発であるとか、ナルシズムへの退行、自体性愛への退行が生じるのではないかと考えることができます。そして、同性愛からナルシズムへの退行に合わせてパラノイアが生じ、さらに症状が進み、自体性愛にまで退行すると、統一体としての自我が分裂する状態、分裂症、統合失調症の症状が出てくるのではないかと推測できます。ただし、これは科学的に立証されたことではなく、私の想像の域を出ません。

最後に、フロイトが同性愛をどう捉えていたのかということに触れておきます。フロイトの『シュレーバー症例論』では、「まさに顕在性の同性愛者や、あるいは顕在性であっても性的な行為は拒む人々が、全人類の利害にかかわる事柄にまで性愛を昇華させ、そうした問題にとりわけ熱心に取り組んで、めざましい成果を上げることもある」と、同性愛について肯定的なことを難しく書いています。しかし、同性愛について、もっとわかりやすく述べた手紙がありますので、それを紹介します。

あるアメリカ人のお母さんが、フロイトに宛てて、自分の同性愛の息子を救ってほしい、治療してほしいという手紙を書き送りました。その手紙は残っていませんが、それに対するフロイトの返書が残されています。これが書かれたのは1935年です。その手紙で、フロイトは同性愛は治療できないし、その必要もないとした上で、こう書いています。

同性愛は恥ずべきことではなく、悪徳でも墮落でもありません。病気に分類することもできないのです。同性愛を犯罪として迫害することはまったくの不正義であり、残忍なことでもあります。

ドイツ、オーストリアに限らず、ヨーロッパで同性愛は犯罪とされ、法律で取り締まりの対象となっていました。ドイツで、その法律が撤廃されたのは20世紀末のことです。そして、ヒトラー・ドイツにおいては、実際に同性愛者の迫害、虐殺が行われていました。そうしたなかで、フロイトが、同性愛は恥ずべきことではなく、悪徳でも墮落でもないとはっきり述べているのは、やはりすごいことだと思います。

最後にシュレーバーのことに戻りますと、今までお話ししましたとおり、唯一の「ほんとうの人間」は自分だけだというナルシシズムに対応して、その世界は「かりそめに急ごしらえされた」ものとなってしまい、現実からは現実感が失われてしまいます。シュレーバー自身は、ひじょうに洗練された文化人であり、文明の人ですから、暴力、破壊については自分の妄想として書き付けたというところに終わっています。あるいは、自分の頭の中では、すでにすべてが破壊されているのだから、現実には何かを壊すまでもなかったとも言えます。ところが、今世界を見渡してみると、実際、この現実を、またそこに生きる人々を「かりそめに急ごしらえされた」ものと見なして、破壊し、殺害する人たちがいます。現実感がないからこそ、平気で壊し、殺すことができるのでしょう。ですから、逆に言うと、自分の外側で、かけがえのない人が生きていて、かけがえのないものが存在しているという認識が外界の現実を現実たらしめていると言えるのではないかと思います。かけがえのない愛の対象が自分の外に存在するからこそ、現実が現実としてあり得る、外界が現実として認識されるのだらうと思います。

ご静聴、ありがとうございました。

○司会（松本） 今日金関先生のご報告ですけれども、ジェンダーの多層性というこのプロジェクトの発表にまさに、どんぴしゃりの内容で

した。一つはやはり人の心の持つ多層性といえますか、複雑さというものが、如実に表れている事例だと思います。理性と狂気というのは二項対立的に語られることが多いですけれども、その間は明確に常に分かれるわけではなくて、幾つもの層が実はあるのではないかというようなことを、私もお報告を聞きながら考えました。

それから、またそこに深く関わっていくジェンダーの多層性というのものもあるのだということ。特に後半は、ホモセクシュアリティの話を書きましたけれども、そのセクシュアリティも多層的なものであり得るし、またジェンダーについても、この19世紀のヨーロッパにおいて、広く共有されているジェンダー規範のようなものも関係しているでしょう。そしてまた、このシュレーバー自身の個人的な経験として、いかにジェンダーというものを内面化していったのかというようなことも関係していると思いますので、そうしたジェンダーの多層性ということについて、いろいろと考えさせられる事例だと思います。

もう一つは、心と体の多層性といえますか、層という言葉で表現するのが正しいかどうかはわかりませんが、肉体と精神というものを2つに分離できるように考えることが多いですが、シュレーバーの場合は、おそらく客観的に他の人が見ると彼の身体は変容していないと思いますが、彼の感覚としては、身体自体がまさに女性に変わるのだというような感覚を持ったりするわけです。それがまた、彼の自己認識ですとか、ジェンダーの認識と密接に関わっていくというようなことで、本当にシュレーバーの『回想録』自体が、なかなか簡単な分析は許さない複雑なものだと思いますが、今日はそのエッセンスを、特にジェンダーに関係することを中心にご報告していただきまして、ここで聞かれた方々もいろいろと考えることがあったのではないかと思います。